



感染症の歴史

令和2年5月21日(木)

今日、新聞を読んでいると「アマビエ」という妖怪が話題にあがっていました。現在私たちはコロナ禍の真ただ中ではありますが江戸時代にもインフルエンザ、コレラ、天然痘といった感染症によって人々は苦しめられました。そこで登場したのが「アマビエ」という妖怪で病を除ける・・・疫病退散のお守り的な妖怪で当時は絵をかいた紙を家の軒先につるしたりしたそうです。現在でもアマビエのイラストの入ったクリアファイルやキーホルダーまでもがつくられ販売されているとのこと。今も昔も人は同じことを考えるのでしょうか。ただ今のように医療体制が整っていない江戸時代でしたが、お守りだけに頼っていたわけではありません。このような感染症や様々な病を乗り越えるべく多くの医師が当時日本と貿易のあったオランダからの学問を取り入れ立ち向かいました。有名な書物としては皆さんも中学校で習った杉田玄白、前野良沢による「解体新書」があります。これを皮切りに医学が幕末、明治へと大きく前進していきました。しかし、医学を学び発展させていく上では多くの障壁がありました。語学の壁、化学、生物学、物理学、数学の知識の必要さを強く感じたようです。当時から数学者や物理学の研究は少なからず存在しましたが、これらの必要性にかられて現代の化学や生物学が芽生えていったことも事実としてあるようです。

皆さんの中には今、6月1日提出課題と奮闘している人も多いかと思います。播農は農業高校です。当然、農業を中心に学んでいきます。これから農業を学び、2、3年となり課題研究に取り組んでいく中で必ず、理科、数学、国語や英語といった語学や社会の知識が必要になってきます。今、取り組んでいる課題もそういった基礎づくりにほかなりません。昨年、一昨年、就職、進学面接練習をしている中でも先輩方からもそういった声が寄せられました。



農業機械による田植え

